

佳作

『何者』 朝井 リョウ著

文学部 文学科1年 秋山 未佑

あなたは、どんな人ですか。そんな質問をされたとき、あなたの手札には何が控えているだろうか。学歴。特技。趣味。留学経験。こんな団体の代表をしていました。こんなテーマに興味を持っています。この人の著書に感銘を受けました。あなたが「何者」であるのかを表すときに、そのうちのどんなカードを、どんな基準で選ぶだろうか。

痛い。寒い。近頃、他人を評する際に、こんな言葉が選ばれることがある。もういい大人なのに、いつまでも夢を見ているなんて、痛い。大した人間でもないくせに、自分は特別とでも思ってるのかな、寒い寒い。あなたが痛い、と思うあの人は、いったいどんな手札をこちらに見せているだろう。

この物語は、冷静な観察力を持つ大学四年生、拓人の人間観察により展開していく。天真爛漫なルームメイトや、同じマンションに住む同級生たちとお互いに高めあい、せめぎあいながら就活に臨むのだが、ここにも、「痛い」奴が出てくる。

「就活就活って人を見るとなんか」「想像力がないんじゃないかなって思う。」「俺は流されたくないんだよね。就職活動っていう、なんていうの？ 見えない社会の流れみたいなものに」

そう語る彼に対し、拓人は「痛い」との評価を下す。自分とは他人とは違うと思いたがる姿を「痛々しい」と。拓人目線の読者は、あー、そういうやつ、いるよね。と感じるだろう。そうそう、「意識高い系」ってやつ、と。

だがしかし、その冷やかすような気持ちは、何か大事なものを隠してはいないか、と筆者は警告する。そして物語が進むにつれて、痛い奴を笑っていたはずの自分の心の奥のほうにある、見ないようにしていた手札が、ゆっくりと、しかし確かに姿を見せる。知らぬ間に、読者を「観察者」から「現実のあなた」へと連れ戻していく。これはつまり、あなたの話ですよ、と。

就活、とは得体のしれない不気味なものである。「確固たるものさしがない。ミスが見えないからその理由がわからない。自分がいま、集団の中でどれくらいの位置にいるのかわからない」からだ。同じような髪形、同じようなスーツ。限られた条件の中で、自分の持つ手札を、いかにうまく使うかの戦い。孤独な戦いだ。丹精込めて書いたエントリーシートで、あるいは必死に練習を繰り返したはずの面接で見切られ、まるで今までの人生をすべて否定されたような気持ちになるかもしれない。

そんな時、この本を手にとってみてほしい。きっと、どんなハウツー本にも載っていない、この大きな敵と戦うのに「本当に必要なカード」が何なのか、教えてくれるはずだ。